LIONS NEWS

LIONS CLUBS INTERNATIONAL DISTRICT 330-A

Vol.4 2024 April

手を取り合って夢が輝く　WeServe

未来への架け橋

新校舎

東京志村ライオンズクラブ 学生支部風の会がラオスに学校建設

学生支部誕生までの経緯

弊会（国際協力ＮＧＯ風の会）の会長が東京志村ライオンズクラブのメンバーと縁があり、会長からの紹介で東京志村ライオンズクラブに弊会の国際支援事業、及び計画中であった学校建設プロジェクトについて説明させて頂きました。その後、弊会の目指す学校建設プロジェクトを発端とするラオスの子どもたちへの教育支援活動にご賛同いただき、東京志村ライオンズクラブ学生支部風の会が誕生しました。

このプロジェクトを始めた背景や目的

このプロジェクトを始めたきっかけは現地の団体にナンサイター小学校と村を紹介していただいた事から始まりました。学校の建物自体が非常に古くいまにも壊れそうなくらい老朽化していること、学校の建物の立地が道路に面しており、車の騒音問題や子供たちが事故に遭う危険があるなど多くの課題があり、新校舎の建設事業を発足しました。

設立までの間にどのような準備や計画が行われたか、地元の協力や資金調達について

安全かつ質の高い校舎の建設を実施するために現地で建設に協力していただける団体を探し、現地のＮＰＯと一緒に建設を実施することになりました。

建設の内容としては新校舎、トイレ、浄水器、になります。かかる費用としては日本円で約５５０万円、その内１００万円を弊会が実施したクラウドファンディングで、２００万円を東京志村ライオンズクラブの皆様にいただき、残りの２５０万円を東京志村ライオンズクラブと学生支部が協力してクラウドファンディングで集めました。

建設する上で村の方の手助けも多くありました。学校の建設地がメコン川の辺ということで雨季に水位が上がった時、学校に被害が出ないよう学校周辺の地盤に砂を使用して地盤を上げる必要がありましたが、その作業を村人全員が手伝ってくださいました。また村長が学校の建設に使う柱を運んでくださったように村全体が学校建設に協力してくれました。

旧校舎

トイレ

メンバーがどのような役割を果たし、どのように貢献したか

渡航準備から渡航期間中全てに渡り、一人一人が自分の役割を持ち、考え行動しました。開校式に向けて現地ＮＧＯと細かな連絡を取りながら、学校でヒアリングしたい内容をもとに、学校の先生、村長にヒアリングをしたり、学校以外で子どもたちの将来の可能性を広げるためにラオスの多くの教育機関を訪問し、メンバー一人一人が中心となって話を回しながら、積極的に疑問に思ったことや今後の支援の可能性を広げるために必要なことを聞いて支援するにあたって必要な学びを深めることができました。私たちが支援をしている学校と他の学校を比較して同じ国の教育でも大きな差があることを感じ、今回の渡航で一人一人が学んだことをもとに、これからの支援について多くの意見を持って活動していきます。

直面した困難や問題点について

ラオス政府は外国人が教育分野に関わることを警戒しているため、現地との信頼関係が築ききれていない段階で準備を進めていた今回の渡航にあたっては、ラオス政府から渡航人数や訪問場所などに関する制限を言い渡されました。訪問場所についてはスケジュールがほぼ確定してから制限に関して告げられたものもあったため、直前でスケジュールを組み直し、訪問先によっては渡航中に直接訪問の許可を取る必要がありました。ビザの取得に関しても３か月前からの手続きを求められました。

また、我々とパートナーシップを組んでいるラオス現地の団体であるＡＣＤ[※1]とプロジェクト実施について協議をしていましたが、ＡＣＤと我々の認識を統一するまでにはかなりの時間を要しました。ＡＣＤは政府の公認を得て活動している団体であり政府が掲げる規則や基準を遵守する必要があるため、プロジェクトの実施内容や学校訪問の日程などに対し渡航前の段階では厳しい条件を言い渡されました。また、ラオスと日本における文化や価値観の違い、ラオスの政治的・経済的事情に対する我々の理解不足により、ＡＣＤに我々の意思が十分に伝わらず協議がなかなか進展しなかった時期もありました。

さらに、今回の渡航は経験者が１人しかおらず、安全管理の面でも困難な点がありました。渡航前の段階で行った事故や病気などのトラブル対策に関する知識の周知徹底には多くの労力を要し、また渡航先では慣れない環境によって体調不良になる者もいたため臨機応変な対応が求められました。

学校建設が子どもたちや地域社会に与えた影響や成果についての評価

学校建設時点では、木材を運ぶなどの作業は村の方の協力を得て行われました。そのため、学校がただ部外者によって建てられたわけではなく、村人自らの手で作り上げた地域の場であることが推測できます。開校式では、多くの村人や生徒の親御さんたちが集まってくださいました。また、村の方の協力のもと、開校式の準備が進められました。そのため、開校式全体を俯瞰すると、村の人々と学校の結びつきを強く感じました。これらのことから、学校建設が地域社会に与えた影響は一定数認められると考えます。しかしながら、上記の評価は定量評価ではないため、これからの渡航で評価の数値化を行っていきます。

浄水器

今後の展望や計画、今後の課題や改善点などあればそれを踏まえた次のステージについて

今回の渡航にて学校や村のヒアリングを通して、現地についての問題点と課題に取り組み、様々な団体に訪問させていただきラオスにおける知見を深めることができました。

今回の渡航にて牛銀行プロジェクトを視察する予定ではありましたが、まだ学校側が牛の購入をしていないため、購入し次第、牛銀行プロジェクトの視察もまた行う予定です。

今回現地に赴いてお話を聞いた中で、現地のＮＧＯだけに頼った協働支援ではなく、教育省を通した支援を行うことができれば最良だと考えております。主に教育面で先生に支払われる給料が少なく、政府からはチョークのみ支給されており、ノートやペンなどの子どもたちに対して政府から支給されるはずの物資のお金を先生達が自分の給料で賄っているということについて問題があると感じたため、教育省と話し合いを進めながら、補助金の申請も行い、先生達への負担の削減とより良い学校の教育支援のため話を進めていきたいと考えています。

また学校に通えない子どもたちのために、勉強することの大切さと楽しさを伝えたいと考えています。それは風の会が役割を果たすことで大きな効果が期待できることだと思っています。

※1 ACDA (Association for Community Development)
南部サラワン県に拠点を置く、ラオス政府登録 NGO。「子供と青少年のための教育の質改善」を目指す。

※2 パクセー・ジャパン経済特区　ラオス南部チャンパサック県の中心パクセーに開発された日系企業専用の工業団地

今回の渡航にて、ラオスの子どもたちの教育に関して、いくつかの幼稚園、小学校、中学校、高校、大学と見学させていただきました。その上で将来について知る機会を与えることで勉強へのモチベーションが上がり、学校で勉強することの大切さを実感してもらえるのではないかと考えています。例えばラオスの職業について紹介することや、色んな職業がある中でその職業に就くためには経験することが大切であるため、※2パクセージャパンと協働し工場見学をしてもらうなどを考えています。またこまめに先生達とも連絡を取りながら、日本の学生としてできる支援は何かを模索し、何か授業を行うことで子どもたちの勉強に対するモチベーションを向上させることが可能ならば尽力していきたいと考えています。

また授業では直接見て、言葉とその言葉を表すものを見ることが大切だと思います。こちらは要望にもあった通り、プロジェクターを設置し、言葉ではなく絵を見ることによる視覚を通して学ぶことで言葉とそれを表すものをリンクさせることで、勉強に対するモチベーションの向上に繋がると考えています。

学校建設事業を終えての思い

今回の学校建設事業を終えて1番に感じているのは協力してくださった皆様への感謝です。東京志村ライオンズクラブをはじめとして多大なご協力をいただいたライオンズクラブのみな様、建設プロジェクトを共同で実施してくださった現地NGOの皆さん、学校建設を手伝ってくださった村の皆さん、クラウドファンディングに参加してくださった皆さん。皆さんの力なしではこの事業の成功はありませんでした。この場を借りて感謝申し上げます、誠にありがとうございました。開校式、校舎で学んでいる生徒の姿を見て未来への希望を確かに感じることができました。この可能性を広げていけるよう、これからも全力で活動していきたいと思います。

東京志村ライオンズクラブ
学生支部 風の会
L 千葉爽汰　L 大山瑠里
L 今井暖望　L 大田原大翔
L 山下萌栞　L 何鳳凰

温故知新

第二回

すずらん給食 実施、盛岡から全国の欠食児童ゼロへ

卓越したリーダーシップと東京・横浜地区クラブの協力、マスコミの力

日本のライオンズクラブ（以下 LC）で語り草になっている「すずらん給食 アクティビティ」が、どのようにして成し遂げられたのかを書物やネット情報 に加え、発祥の地、盛岡 LC の協力を得て現地取材を実施しました。

1月26日盛岡LC事務局にて、**レジェンドメンバーの伊藤英明L 332-B地区 宮田謙 元ガバナー 今期幹事の浅沼克人L** の3名にお話を伺いました。

キーパーソンの存在と LC 仲間の連携

中村七三 L
前野和久氏（毎日新聞記者）
県保健体育課給食係長 香森七蔵氏
薮川小学中学校 宮 五郎 校長と
盛岡 LC メンバー
首都圏のブラザークラブが連携しました。

現地取材インタビュー　L 赤尾嘉晃 (東京豊新 LC 所属)

本アクティビティの提唱者の一人、**中村七三L**は江戸時代からの名家の出身（父は岩手銀行の創立者）、ビジネスでも成功され趣味の薔薇の品評会においても、米国NYの世界大会で新種の花が優勝するという経験をお持ちの方でした。長年、青少年健全育成に携わり、1963年12月にへき地薮川小・中校の**宮五郎校長**と懇談し、欠食児童の存在を聴き、LCで現地調査を行いました。

1965年3月岩手県庁、教育委員会での出会いが事を動かすことになります。中村Lは県内高校の授業料引き上げについて打ち合わせに行かれ、取材に来ていた毎日新聞社の記者**前野和久氏**（薔薇栽培で取材を受けた）と再会し、薮川地区の欠食児童の現状を話されました。「もはや戦後ではない」と宣言されて10年が経過した時期に欠食児童がいると聞き、事実を確かめるために翌日即、前野記者、香森七蔵氏、岩手放送の記者が取材に出かける事になったのです。

東洋のチベットといわれる岩手県の高地薮川地区。本州で最も寒く米は育たず、アワとヒエが主食の地域。そこにある薮川小・中学校の宮五郎校長と児童生徒に会いヒヤリングを開始。給食は週3回の脱脂粉乳のみ、お弁当を持ってこられている児童生徒は5人に2人の割合でした。お腹が空いて、腹痛を起こす子どもが多くいて、身体は痩せて全国平均値より小さいながらも皆昼ごはん以外は、児童生徒は皆、楽しく授業を受け明るく振舞っていました。

今期幹事の浅沼克人L

レジェンドメンバー 伊藤英明L

332-B地区 宮田謙 元ガバナー

毎日新聞社 社説掲載

戦後20年も経過して欠食児童生徒の存在とへき地の給食事情を初めて取材した前野記者は衝撃を受けて即記事を書いたそうです。記事は盛岡支局内でスクープと位置づけられ夜汽車で本社へ送り、1965年6月に毎日新聞全国版の社説に掲載されました。その記事が時の佐藤栄作首相の目に留まったのです。

盛岡LCのアクティビティの考え方

盛岡LC内では、給食アクティビティ導入に対して長期に渡り支援可能かが、争点となり慎重な意見もあったそうです。クラブ内に「さかなを贈るなら、釣り竿の使い方を教える」というドネーション先へ「真の励ましと希望、自立を促す」基本的な考えがあり、そこで高地ならではの「すずらんの花を児童生徒が自ら摘んで」それらを盛岡LCメンバーが地元企業へ連携を呼びかけ迅速に輸送し、設立当時から交流のあった首都圏のブラザークラブに購入してもらう理想的な双方向のアクティビティが生まれたのです。

県内のへき地へ、他の方（へき地をよく知る農林省の神奈川県出身の役人）からも支援があり楽器を贈られ鼓笛隊が結成され、盛岡市内の学校と肩を並べる演奏ができるようになり、地域の歌も作詞・作曲され歌われたそうです。

すずらん給食後の展開と発展

社説に掲載後、全国の欠食児童調査が行われ、国の緊急予算が組まれ完全実施へ動き出しました。次年度にはへき地給食給付費用が予算化され全国約14万人の子ども達がパンとミルクの学校給食を食べられるように広がりました。全国から大きな反響もあり、多くの寄付が岩手へ届けられました。一方、地元では全国へ県内の「恥」を大きく報じられたことで反発もあり、地元周辺地域からの寄付は大変少なかったそうです。情報発信する場合にリーダーが何を優先するかを決め、発信後に様々な意見が寄せられることを予想し、対応策を準備していることが大切と感じました。

その後、「すずらん給食がきっかけ」となり、へき地の中学生が高校へ進学できるように県内で「高校奨学金・岩手育英会」が発足されました。LCの青少年育成事業発展が地域の教育制度改革まで到達したことは大きな意義があった思われます。

盛岡LCは、その後も様々なアクティビティを展開しています。青少年育成を中心に各種スポーツ大会を開催し、No・1決定以外にスポーツ好きが参加し活躍できる大会を設け、子ども達の広がる夢の実現の一端を担い続けています。

結びに、これからのアクティビティを伺ったところ、「すずらん給食」の成功があまりにも偉大で、それを超える事業を現在の多様な価値観がある地域で見出し、すべての人に役に立つことがなかなか難しく、交通網が整備され「都市化した市民の課題」へ挑戦していくとお話しされていました。

約60年前のアクティビティを取材して

同じテーマ・課題を解決したい仲間を増やしたことが、成功の一つの要因と思いました。また、児童生徒も自ら「すずらんの花」を摘みバス、鉄道で輸送し、一方通行のアクティビティでない点が社会の共感を呼んだと感じました。

令和の時代になって、地域社会には多様な考え方、課題があり、テーマを絞って奉仕活動をするのが困難となっています。そのような中でもLCメンバーが行政や地域団体と今以上に交流を密にしてアンテナを高くしていると、地域の課題を見出し易くなり、我々LCでしかできない奉仕を必要としている方々へ「希望の光」をあてられる機会が増えていくのではないでしょうか。

命を守る使命を共に

東京麻布ライオンズクラブ

1971 年当時の「防衛施設庁」を献血会場として始まりました

近代的な輸血法が日本に入ってきたのは1919 年 (大正 8 年)まで遡ります。そして日本における献血制度は、1964 年 3 月に発生したライシャワ–米国 駐日大使の刺傷事件により急速に広まりました。東京麻布ライオンズクラブの献血アクティビティは1971年より、当時の「防衛施設庁」を献血会場として始まりました。
その後会場が六本木から市ヶ谷の「防衛庁」に移動した後も今日まで献血会の実施を継続して開催しております。
献血は毎年 7月・10月・1月・4月の 4 回に亘り延べ 20日間実施しています。
そうした活動に小池百合子第 2 代防衛大臣 (当時) が会場を訪れ献血にご協力され、浜田靖一自民党幹事長(当時)が防衛政務次官であった頃に会場を訪れ激 励を頂いたこともありました。我が国の防衛を担う防衛省の職員や自衛官の献血に対する意識は非常に高く毎回500 名以上の皆様に献血をご協力いただい ています。その献血総量は毎回 200,000ml に達し特出した採血量を達成しています。当クラブでは献血者に対して謝礼品としてハンドタオルやボールペンを提供し50回以上の献血協力者に対しては記念品を添えて感謝状を呈上しています。
血液には生きている細胞が入っているため、長期保存が出来ません。「赤血球」は採血後 28日間、「血小板」は採血後 4 日間、「血漿」は凍らせて採血後一年間しか保管が出来ません。そのため絶えず多くの方の献血が欠かせません。自然災害や世界で起こっている地域紛争等、平和と程遠い境遇が発生しているこの時代において、助け合う精神をモットーにした輸血活動の意義も大きな社会的メッセージです。
東京麻布ライオンズクラブは、本活動を通して日本赤十字社、献血活動を支援しています。

当クラブのもう一つの大切なアクティビティとして献眼活動があります

献眼

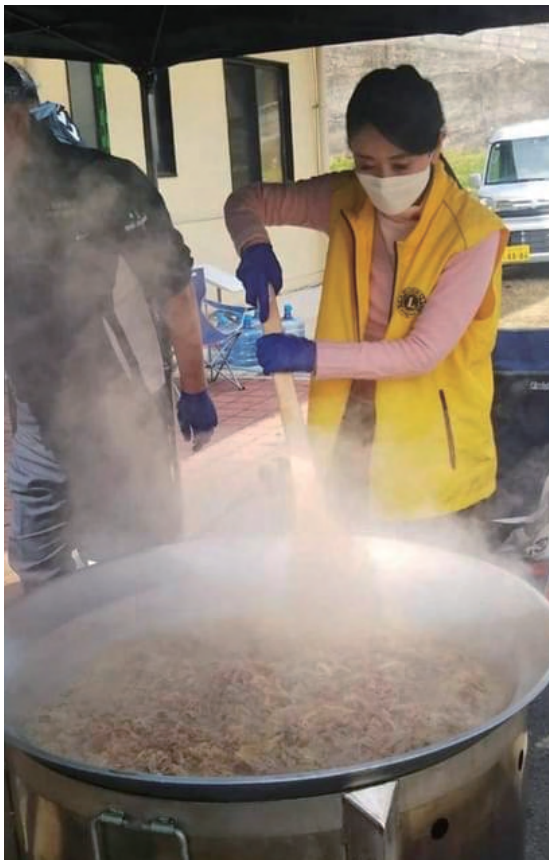
本アクティビティは献眼登録の推進を活動方針の主な目的で進められています。献眼登録の啓蒙活動も単純に登録者の数を増やすのみでは効果が薄く、如何に移植に結び付けられるかが問われています。
昨今では、IPS 細胞を利用した人工角膜の開発研究も行われていますが、実現までは多くの時間を要する課題もあります。
1993 年 4 月に、当クラブチャーターメンバー横瀬寛一 L より資金援助の申し出もあり発足した東京歯科大学市川総合病院「角膜センターアイバンク」の設立を契機に、当クラブでは角膜提供者の遺家族と視覚を回復した患者と移植医そして角膜提供の実施を遅滞なく実施に結びつける移植コーディネ–タ–の三者が集いそれぞれの立場から思いを述べ合う「ドナ–ファミリ–の集い」を毎年開催しています。角膜提供者の鎮魂と遺家族に対する感謝を伝え視覚回復者の喜びの声を共有する催事を行っており、30年に亘り支援を継続しています。
今回で 25 回を迎えたこのアクティビティには地区ガバナーと共にライオンズ クラブが如何に角膜移植の推進活動に携わってきたかを来場者に伝えています。共感を得ない奉仕活動は大きな成果を得る事は出来ません。
「ドナ–ファミリ– の集い」は実直な活動方針に共感していただくことで、参加者のドナー登録に貢献しています。
本活動は、昨年から財団法人視覚健康財団が活動を引継ぎ慶應義塾大学病院に 事務局が設置されました。
この催事を東京麻布ライオンズクラブは今後とも応 援しクラブ奉仕活動の重点事業として継続して参ります。

能登半島地震災害支援チーム

3/23(土) 能登半島地震の支援物資を運んで頂くのを助けていただきました高岡アラートライオンズクラブの 10 周年のお祝いに伺いました。高岡アラートの素晴らしい活動が能登半島地震で被害に遭われた方々に勇気や元気を与えて下さっているとあらためて感じました。おめでとうございます。

そして、3/24(日) 本日は 朝から能登町に伺い、炊き出しのお手伝いをさせて頂きました。
お天気が良くて、こんな穏やかで暖かい朝は珍しいですよ。との事、活動しやすく助かりまし た。
高岡アラートライオンズクラブと330-A地区緊急アラート委員会、有志の仲間たちで、牛丼、
332-C地区松戸中央ライオンズクラブの皆様は氷見牛入りのコロッケ、
兵庫県今治からライオンズクラブの仲間たちはうどんを作り、300名の皆様に提供させて頂きました。
「こんなにたくさんのライオンズさん？ありがたいです」とか、
牛丼のお肉がなくなってしまい、ご飯に「その汁だけでも美味しそう」など、励まされ帰京しています。
また、能登の教育委員会委員長と面談し、5 校ある小学校にダンボール卓球台を 330-A 地区として寄贈させて頂きました。(特殊加工でプラスチッくのようでびっくりします)
こちらも、能登ライオンズクラブ山本 明人次期 ZC に調査して頂き、校庭は仮設住宅になる予定、校内で身体を動かしストレスを発散して頂きたい気持ちと一致しました。どの小学校にも卓球台がなかったのです。
子ども達は知らないうちに震災のストレスが溜まっていきます。身体を動かし少しでも元気に なって頂きたいです。
日々、必要なもの、必要な事、現地で頑張っていらっしゃるライオンの皆様とタックを組んで 出来る事を。
と被災なさっていても活動なさるライオンの皆様に感謝の気持ちです。

ライオンズクラブ国際協会 330-A地区 地区ガバナー 阿部かな子



JAPAN

ライオンズクラブ国際協会 創設100周年記念事業
撮影 L 赤尾嘉晃

編集後記

2024年(令和 6 年) 4月 3日に起きました台湾東部の地震により被災された方々そして関係者の皆様に、心よりお見舞い申し上げます。日本では桜も開花し、気温も暖かく過ごしやすい季節となってきました。
今回の地区ニュースでは、東京志村ライオンズクラブ学生支部風の会によるラオスでの学校建設、盛岡 LC から始まったすずらん給食特集第 2 弾、東京麻布ライオンズクラブによる献血・献眼登録推進活動、能登半島地震における災害支援活動といった盛りだくさんの内容となっています。地区ニュースを読むと他クラブの活動を勉強することができ、刺激にもなりま す。国内だけではなく海外での奉仕活動、幅広い人々との交流によって広がっていく 330-A地区のアクティビティの今後が楽しみで仕方ありません。
個人的には、盛岡 LC まで足を運び直接取材が行われたすずらん給食の記事は、令和時代の今でも奉仕活動をどのように始め、発展させていくかの大きなヒントが散りばめられていて、読み応えがありました。
また、私自身も経験した能登半島地震への継続的な支援には、北陸出身として感謝しかありません。
ありがとうございます。ただ本質的な復興にはまだまだ時間がかかり、継続的な支援が必要です。
これはどの奉仕活動にも通ずるものだと思います。
私自身もライオンズクラブのメンバーたちと共に本質的な奉仕活動ができるようにこれまで以上に考えていかなければならはいと感じました。

L 坪坂有純 (東京新宿ライオンズクラブ)

電子版

2023-24 広報・IT 委員会

L 藤田 紘子	委員長	東京ヒルズ LC
L 石橋 卓磨	副委員長	東京稲門 LC
L 小野 健志	副委員長	東京平成 LC
L 河田 淳一	副委員長	東京平成 LC
L 吉岡 晋	副委員長	東京けやき LC
L 赤尾 嘉晃	副委員長	東京豊新 LC
L 大和田 博道	委員	東京葵 LC
L 茂原 由美	委員	東京麻布 LC
L 柿澤 幸絵	委員	東京江東南 LC
L 茂岡 幹弥	委員	東京白門 LC
L 坪坂 有純	委員	東京新宿 LC
L 三代 勝之	委員	東京スバル LC
L 石田 賢	委員	東京三鷹 LC
L 根岸 雅也	委員	東京八王子いちょう LC
L 坪谷 茂	アドバイザー	東京平成 LC
L 坂本 純一	アドバイザー	東京三鷹 LC
L 向井 忠義	アドバイザー	東京小金井 LC

表紙撮影 L 坂本純一

ライオンズ国際協会 330-A地区 ライオンズニュース vol.4		発行人:広報・IT委員会 委員長 L 藤田 紘子
発行:2024年04月	202400420	

Copyright 2023-24 330-A Lions Clubs International All Rights Reserved.